

ヴァンパイア
恋する吸血鬼— *The Unicorn* (1963) のレズビアニズムを読む

大道 千穂

マードックがその作品のなかに多くの男性同性愛者を描いたことはよく知られている。社会の周辺に追いやられてきた彼らが自分たちの権利を訴えた60年代の運動にも深く共感し、同性愛者の権利を擁護するエッセイを発表したこともあった。しかしその一方で、彼女自身もその傾向が認められるレズビアニズムへの作品中の言及は少なく、先行批評でもほとんど取り上げられてこなかった。そこで今回の発表は、1963年に発表された『ユニコーン』を中心に、マードックにとってレズビアニズムを書くことの（不）可能性を探ることを目的とした。

マードックの全26作の小説のなかで、同性に性的な関心をみせる女性キャラクターが登場する作品は8作。男性同性愛者が登場する作品が20作近くあることを考えればその数は格段に少ない。そして、男性同性愛者たちの殆どが自らをホモセクシュアルと自称するに対し、同性愛的な傾向をみせる女性登場人物のなかで、自身をレズビアンと

表現する者は殆どいない点、彼女たちの多くが主役というよりむしろ印象の薄いキャラクターである点、また彼女たちの多くがバイセクシュアルである点から、マードックのレズビアンたちが、男性同性愛者とは大きく異なる位置を与えられていることは明らかである。この温度差は何だろうか。

ごく単純なレベルで考えれば、キリスト教の将来について、また人間の良心や罪意識について関心が深かったマードックにとっては、法に触れることがなかった女性の同性愛よりも男性の同性愛のほうがおもしろい題材であった、ということに尽きるのかもしれない。これまでのマードック批評においては、実は私自身も含めて、女性の同性愛についてはこの一言で片づけられ、その意義が深く問われることはなかった。しかしながら、たとえば祖父が孫娘に性的関心を抱く作品が1作、父親が娘と関係を持つ作品が1作、兄と妹が関係をもつ作品が1作、中年男性が少女に恋をする作

品が1作、というふうに、マードックが描く、ストレートではない愛のパターンを挙げていくと、彼女の作品世界に描かれる同性愛的傾向をもつ女性たちの数は、決して少なくはない。マードックはなぜ、いろいろな小説にレズビアン的な傾向をみせるマイナーキャラクターを登場させたのか。その意義を考える一端を、1つの作品に登場するレズビアンが3人ともっとも多い『ユニコーン』に探った。

『ユニコーン』は寓話とアレゴリーに満ちたゴシック小説仕立ての小説である。荒涼としたゲイズ邸に幽閉される美しき女主人ハナ、彼女の親戚であり女中頭であり看守であるヴァイオレット、そして何者かにだまされるようにこの館にガヴァネスとしてやってきたマリアン。この3人の濃厚な愛の描写が意図するものは何なのか。発表では主に鏡と女性に関するブラム・ダイクストラの議論を援用し、この作品に描かれているレズビアン

ズムが、吸血鬼にたとえられる女主人ハナの、極度に肥大化した自己愛の倒錯した投影方法であったこと、すなわち、偽りの愛であったことを明らかにした。小説の結末に用意されたハナの死とゲイズ邸におけるコミュニティの崩壊は、偽りの愛が招いた当然の結果なのである。

マードックも人生において何人かの女性を愛した。とくにフィリッパ・フットとの50年に及ぶ関係は、彼女にとって、異性との恋愛関係においては経験しなかったほどの苦しみや喜びを伴う深いものであったようである。マードックが作品にあまり多くのレズビアンを描かなかったのは、レズビアンとしての彼女自身が、自己愛にとりつかれたエゴイスティックで低次の愛を、プラトンのような高次の愛に引き上げることに大きすぎる葛藤を抱えていたからなのではないか。そう示唆して発表を終えた。

(会員)